

序 文

本書の第1章に川口教授によるPSH (perioperative surgical home)についての記載がある。この内容は私が長年思い描いていたチームによる周術期医療の基本である。麻酔科医は麻酔科医の領域だけ、看護師は看護師の領域だけ、といったわが国の旧態然とした医療、いわゆる自分たちの必要な情報だけもっていればよい、という非有機的な医療ではなくお互いに情報を共有しながら医療を行うことこそ今わが国で求められている周術期医療だと考えている。

現在、奈良県立医科大学では、日本版PSHを実現すべく周術期管理センターを設置して多職種が有機的に一人の患者にかかわって安全で質の高い周術期医療を提供するべく日々活動しているが、今後多くの病院が同様の体制をもつことがわが国の周術期医療の質を上げるうえで大きな力になると思われる。

そして多くの職種がチームとなってこのような周術期医療を現実に実践するときに、自分の領域だけでなく他の職種の領域でもふと気になること、ちょっと調べてみたいことが出てくることがある。そういうときには教科書ほど詳細な記載ではないがエッセンスを見ることができる書が手元にあれば有用である。

そこで本書では、日々の周術期診療で入院から退院に至るまでに患者とかかわると思われる多くの職種、すなわち麻酔科医、病院経営を専門とする医師、歯科医、薬剤師、手術室や集中治療部の看護師、臨床工学技士、理学療法士、作業療法士、管理栄養士、歯科衛生士、臨床心理士、医療ソーシャルワーカーなどだが、それぞれの専門分野にかかわる最新の英知を簡潔にまとめて執筆している。大きさもA5判で持ちやすく常に携帯することもできる。内容は周術期の麻酔管理、薬剤管理、栄養管理、口腔機能管理、リハビリテーションなど、質の高い周術期医療を提供するうえで役に立つ内容だと確信している。

本書を日々の周術期医療を実践するために役立てていただきたい。

2015年5月

奈良県立医科大学附属病院 病院長
古家 仁